

特集 あれとこれで作ってみた
美術の授業
デジタルリノベーション



本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の教科書情報
詳しくはWebへ!

日文 検索



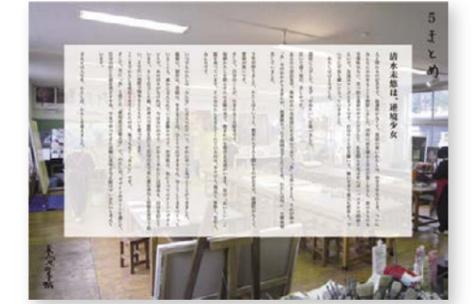
この冊子は、以下の内容解説資料として扱われます。
平成30年(2018年)度版 高等学校芸術科美術II
平成31年(2019年)度版 高等学校芸術科美術III
令和2年(2020年)度版 小学校図画工作科
令和3年(2021年)度版 中学校美術科

生徒作品解説 私の見方

文：長野県上田染谷丘高等学校 教諭 齊藤 篤史



3



高等学校3年 ポートフォリオ [紙/各29.7×42cm全6ページ] 2016
平成31年(2019)度版 高等学校芸術科美術III教科書「高校生の美術3」 p.42掲載

「今までやってきた活動に意味を与え続けていきたいと考えています。カルビ^{*}は人生を、私は、私を変えました。」
高校三年間の妥協のない、心優しい創作活動の成長記録をまとめた「ポートフォリオ」最終ページ、彼女の決意にも似たこの文章を読み返すたび、指導当時の深い共感が静かに蘇ります。
作品をプレゼンテーションするとき、持っておきたい必須アイテム「ポートフォリオ」は、自分の活動を伝える最適なメディアと言えます。
彼女は「何をどう見せるか」を整理し、見る人に共有したい情報が、正しく届く形になるよう検討を重ね、ただ作品を見せるだけでなく、自身の「問題意識」や「作品コンセプトの言語化」「ステートメント(声明)」も大切な要素として、独自性が伝わるよう工夫しました。
「過去から最新の情報」まで作品の頭を素直に記録し、創り続けてきた生き方まるごとが、期待や感動となって見る人の心に真つすぐ届く編集、それが彼女の「ポートフォリオ」を通してコミュニケーションなのかもしれません。
あなたはごう思いますか？

※長野県軽井沢高等学校美術部の略称。 | 小 | 中 | 高 |

形 forme No.322-2020

日文教育資料 [図画工作・美術]
令和2年(2020年)10月22日発行
編集・発行人 佐々木秀樹
発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33516

日本文教出版 株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171
東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618
九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938
東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261
北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690

「forme」は広く現代社会の要求に応える美術教育の理論と実践の紹介を目的として、以来六〇年を超える長きにわたって、美術教育に寄り添って刊行を続けています。「forme」という書名は、造形と人間形成をシンボライズしたものです。子どもたちのための美術教育に取り組んでおられる先生方、美術や造形にかかわるすべての方々、そして保護者の皆様のために、これからも、よりよい美術教育を目指す道標となる内容を目指していきます。

Index No.322

- ② 特集
あれとこれとでやってみた
美術の授業デジタルリノベーション
- ⑦ ABC PICK UP
阿部宏行
- ⑧ 学びのフロンティア (小学校)
言葉から思いを広げて 中村珠世
- ⑩ 学びのフロンティア (中学校)
伝える、伝わるポスターづくり 小林 稔
- ⑫ 学びのフロンティア (高等学校)
素材と歴史から知る 吉田 剛
- ⑭ 子どもの絵の見方
|第10回| 言葉から生まれる世界 奥村高明
- ⑯ 村上センセイの 教科書利用のススメ
|第1回| 国立市立国立第二中学校 長尾菊絵
- ⑰ インタビュー
グラフィックデザイナー 大溝 裕
- ⑳ まず見る
|第25回| かくしてみる 成相 肇
- ㉒ 生徒作品解説 私の見方
斉藤篤史

表紙説明

表紙はインタビューページでお話を伺った、グラフィックデザイナーの大溝裕さんによるデザイン。「最後の晚餐」を、デジタル処理で再構築して遠隔授業風に仕上げてもらいました。大溝さんのインタビューは18ページからご覧ください。



アートディレクション：清水 一（東京矢印）
編集・ディレクション：山本武義（東京矢印）
デザイン：東京矢印
特集テキスト：坂本のどか
表紙デザイン：大溝 裕（Glanz）

ページ下部に、それぞれのコーナーと校種の関連性の強さを表示しています。各企画は小・中・高全ての校種に関連がありますが、特に関連の強い校種を大きくしています。
例： | 小 | 中 | 高 | 特に中学校に関連の強いコーナーを表します。

あれこれやってみた 美術の授業

デジタルリノベーション

この春、新型コロナウイルスに起因する休校措置は数カ月に及びました。教室での授業ができない、この期間に、学校現場では様々な方法の遠隔授業が模索されました。生徒に直接会うことができない状況で、美術では何を、どのように伝えることができるのか。この特集では、よく行われている遠隔授業を特長別に「収録配信型」「ライブ双方向型」の二つに分類し、それぞれの実例をインタビューで紹介しながら、これからの美術の授業の可能性について考えてみたいと思います。



収録配信型

動画コンテンツの配信などにより、教室での授業の一部または全てを代替する方式で、オンデマンド*授業などとも呼ばれます。事前に教員がインターネット上にアップロードしたコンテンツ(動画、テキストなど)に、生徒それぞれが自由なタイミングでアクセスし、個別に学習する形式です。

*オンデマンド(on demand)とは、要求に応じて、要求があり次第という意味。YouTubeをはじめとするインターネット上の多くの動画配信サービスはオンデマンド型と言える。

ライブ双方向型

教員・生徒双方がZoomやMicrosoft TeamsなどのWeb会議システムを利用して行う形式。ネット上の同じ場所へアクセスすることで、リアルタイムかつ相互のコミュニケーションを伴うことができます。利用するシステムにより、登録の要不要、料金の有無、一度に参加可能な人数ほか、機能も様々です。

同時刻にインターネット上で行う授業を行うことの制限などが違う





ABC PICK UP

4コマ漫画で、子どもや図工のことを学べるABCシリーズ。ここでは、同シリーズから毎号のテーマに合わせた内容を選んでご紹介します。

今回は、7月に発行されたばかりの「評価のABC」p.26をピックアップ!

好きこそものの上手なれ

図画工作・美術の教科の目的は、「絵がかける」ことではありません。大人の受け取りが、「絵がかけるか・かけないか」になって、「絵をかくことが嫌い・苦手」で、「だから図画工作・美術が嫌い」と結び付けて考えると問題があります。

本来、自ら表現したことについて、「本物のようにはかけない」など思ったようにならないとあきらめたり、他者の言動によって不快な感情をもったり、他者との比較などで劣等感を抱いたりすることから「嫌い」が生まれます。「好きになる」には、自分なりの表現方法を互いに認め合える学習が大切です。ほめられることに、不快な感情をもつ人はいません。子どもに寄り添い、その子なりの表現方法を認めてあげることや、「いいね」などの励ましが、「好きになる指導」のスタートになるといえるでしょう。

※このコーナーは、ABCシリーズからピックアップしたページを基に、再編集して掲載しています。

ABCシリーズのラインナップ



ABCシリーズは公式Webサイトで全編をお読みいただけます。また、冊子をお送りすることもできます。



著者紹介
あべひろゆき
阿部宏行

1954年生まれ。札幌大学女子短期大学子ども学科教授。中央教育審議会 初等中等教育分科会教育課程部会 幼児教育部会委員、同芸術ワーキンググループ委員(平成29年)、文部科学省「学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者主査(小学校図画工作)」(平成29年)などを歴任。北海道教育大学岩見沢校教授を経て現職。

小・中・高を通して「図画工作・美術」の教科書をつくっているのは、日文だけ。これからも「図画工作・美術」を応援します。



小学校図画工作教科書



中学校美術教科書



高等学校芸術科美術教科書

まとめ

先生の取り組みより

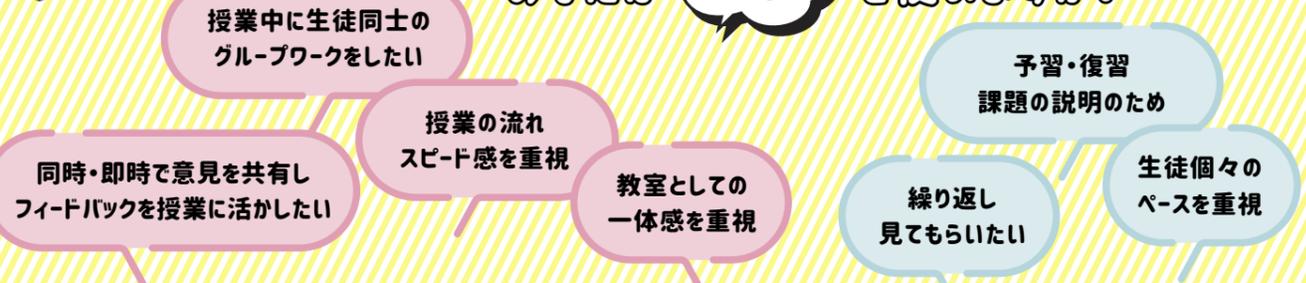
収録配信型の動画を授業の一部として導入した中村先生と、オンライン完結のライブ双方向型授業を実践した渡邊先生。美術の遠隔授業について、その可能性の捉え方に違いはあるものの、共通してお聞きできたのは、「美術(の授業)は多様な価値観の創造・共有を担っている」という言葉です。そのことを生徒に伝える際に重視するものが異なるがゆえに、遠隔授業でできることの捉え方にも差異があるのだとすれば、それもまた美術教育のもつ多様性と言えるのかもしれません。

また、渡邊先生のオンライン完結の授業も、一つのツールで全工程をまわっているわけではありません。実施したい授業内容と、使用可能な複数のツールや機能を照らし合わせながら、どこを何によってオンライン化可能かを検証した結果、オンラインのみで組み立てることができた授業なのです。

収録配信型、ライブ双方向型共に、オンラインで授業を完結させることにはこだわらず、まずは授業を組み立てる要素の一つとして捉えること。それが、非常事態に限らず、より多様な状況に柔軟に対応できる授業づくりに繋がるのではないのでしょうか。



あなたはどれを使いますか?



A ライブ双方向型ツール



B 配信型ツール



※代表的なツールの一部を紹介しています。

コロナ禍の学校現場 こぼれ話

ネットや機材環境をどう整えるか

遠隔授業を実施するには生徒側にも端末やネットの環境が必要です。在宅の場合は生徒自身が端末を持っていないと、家族のものを共用すれば、環境は整いやすくなります。しかし、どんな学校でも大体1~2クラスに1人くらいはどうしても環境が整わない生徒がいるようです。学びの可能性を広げるためには、**全員**の環境を整わないから、遠隔授業を行わないと考えるのではなく、**環境の整わない生徒へのケアを優先し、全体の環境を整えるために何が出来るかを考えていくことが大切です。**学校のタブレットなどを優先的に貸し出したり、地域のレンタルサービスと連携したりすることで、全員が等しく遠隔授業を受けられるようにしていくことが、社会の変化へのよりよい対応策と言えるのではないのでしょうか。

Withコロナを逆手に取る実践



Withコロナ社会における美術授業の取り組みは遠隔授業ばかりではありません。学校に生徒が戻ってきたところで本誌p12~13に登場する吉田先生が実践したのが『マスクを付けた自画像』。コロナ禍の状況を切り取る現代社会と接点のある題材なのですが、マスク着用を学ぶ設定のためマスクの忘れ物が減ったり、描画材も鉛筆一本で、授業後の消毒の手間が少なかったりするなど、コロナ対応の工夫が考えられている点も特徴なのです。

◀生徒作品 作品提供:滋賀県立草津高等学校



言葉から思いを広げて

「詩」から感じたことや考えたことを絵に表す活動。
子どもたちはそれぞれに
豊かなイメージを広げて表現に取り組みました。
多様な表現を生み出す手立てについて中村先生に伺います。

北海道 北海道教育大学附属札幌小学校 中村 珠世 先生



イメージを広げられる 空間づくりと材料と用具

「物語の絵」は、ある場面をかくという先入観があり、思い描くものも似てしまう難しさを感じていましたが、国語で詩を取り上げたとき、一人ひとりが違うイメージをもっているように感じたので、詩をきっかけにすれば、多様な表現が生まれるのではと考えました。

詩は、情景や作者の伝えたいことを読み取りやすそうなものから抽象的なものまでいくつか選び、模造紙に印刷したものを貼っておきました。こうすると、気になる詩の前で自由に対話でき、移動もしやすい。イメージを伝え合うときに体を使うこともできます。目線より少し上なので、話に加わっていきなくても指差しているところが分かりますよね。

今回は材料も吟味し、基底材は三種類、それぞれ三つの形を用意しました。紙の種類を増やしたのは、描画材と基底材との相性も考えながら、思いやイメージに合うように材料や用具

具を活用してほしかったからです(描画材も数種類用意しました)。形を複数用意したのは、「絵イコール四つ切」というイメージを壊したいということと、小さい紙なら試しながら表したいことを考えることができると思っただけからです。小さい紙を組み合わせたか、切った紙を組み合わせたり、切った紙を折り合わせる子や、和紙を折ってにじませて使う子など、思った以上に多様な表現が生まれました。

対話が表現を広げる

授業中はいつも子どもたち同士の対話を大切にしています。いつでも話したり友だちの表現を見たりできるようにしています。

悩んでいる子にも「こうしたら」と方法を提案するのではなく、同じ詩を選んでいる子を紹介して見てくるように促しました。与えられたことよりも自分で探して見つけたことの方が深く残ると思うんです。

いつも繊細な表現をしていて、今回も最初はそうだった子

↓がいたのですが、途中で見に行くと、とても大胆な表現になっていてびっくりしました。友だちの様子を見ることが「これもいいな」と感じ、自分の殻を破ったんだと思います。

「詩」のもつ多様さが、 表現の多様さに

子どもたちはさまざまに試して表現を追求していました。詩は読み方によって自分の中のイメージも変わっていきますし、人によっても違う。解釈の幅が

広いのがよかったです。私です。何よりうれしかったのは、私のイメージを軽く超えてくれたことですね。一人ひとりからその子なりの表現が生まれ、本当に豊かな場になりました。

(i) 選ばれた詩の傾向はその年や学級によって違うように、このときは寺山修司の「てがみ」や金子みすゞの「わらい」が多かったようですが、もっと抽象的な詩が選ばれた年もあるそうです。
(ii) 表現のときに手元でも見られるように、小さい冊子にしたものも用意されたそうです。
(iii) ほかの活動でも、途中の作品をつるし、子どもたちが見ることができるようになっている。普段の考えの延長線上に、今回の場の設定があるようです。

活動の流れ

② イメージを求めて	① 詩に出会う
④ 対話で表現を深める	③ 試しながら考える

② イメージを求めて
アイデアノートに簡単な言葉や絵でかきながら、自分が感じたことやイメージを広げていきます。

① 詩に出会う
つるされたいくつの詩。一つの詩について、みんなで10分程度意見を出し合った後、好きな詩の前に行き自由に話し合うなどして、詩を味わいます。

④ 対話で表現を深める
自由に見たり話したりすることで、いろいろな視点や考え、方法を見つけ、自分のものにしていきながら表現を深めていきます。

③ 試しながら考える
試行錯誤を繰り返すことで、徐々に自分がよいと感じる形や色を見つけていきます。試している途中で全く新しいことにチャレンジするのも、もちろんOK!

指導計画

時間	分野
8時間	絵に表す
材料・用具	
画用紙、版画和紙、ボール紙(各10×10cm・10×25cm・八つ切の三種類)、水彩絵の具、アクリル共用絵の具、コンテ・パステル など	
題材の目標	
<ul style="list-style-type: none"> ●知識及び技能 詩から感じたことや考えたことを表すことを通して、動きやバランス、奥行き、色の鮮やかさなどの造形的な特徴を理解し、表したいことに合わせて、材料や用具を活用し、工夫して表す。 ●思考力、判断力、表現力等 形や色などの造形的な特徴を基に自分のイメージをもちながら、詩を読んで感じたことや考えたことから表したいことを見つけ、形や色、材料の特徴、構成の美しさなどを考えながらどのように主題を表すのか考える。 ●学びに向かう力、人間性等 主体的に詩から感じたことを材料や用具を活用して表す学習活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする。 	

Message



自分の内側にあるものを表現するというのは、勇氣があることだと考えています。必ずしも自分の表現したことが認められるとは限らないですが、から。そういう思った通りにならなかったときに、めげずにいろいろと試して、よりよいものにしていくこととするしなやかさが育ってほしいですね。

夢中になること しなやかに取り組むこと

ということも大切にしています。図画工作に限らず子どものところに何かに夢中になれるというのは、自分が向かっていきたいと思うものに出会うきっかけになりますから。

夢中になって、でもしなやかにものごとに取り組んでいく。そして自分がやってきたことに対して、「やっぱりこれが好きだな」と思えるような人になってくれるといいですね。



子どもたちの作品はこちらからもご覧いただけます。



伝える、伝わる ポスターづくり

個人で深め、みんなで話し、
アイデアの可能性を広げよう！

多くの中学生にとってポスターは、「ひとりで考え、つくりあげるもの」。街中で見掛けるポスターが、様々なクリエイターの共同制作によって生み出されているということに気付いていない生徒も多いといいます。そこで小林先生が考えたのが、個人とグループの活動を行き来するポスターづくり。立体物を写真に撮ってポスターにする過程で、生徒同士のつながりがもたらす効果をお聞きしました。

佐賀県 佐賀県立致遠館中学校・高等学校 小林 稔 先生



すべての生徒が輝く
ポスターづくり

この題材は「ポスターづくりの過程で伝える」「ポスターで伝える」という二つの「伝える」をテーマに、共同制作を重視して組み立てました。共同制作に重きを置いたのは、活動の中で生徒それぞれの輝く場面があるといいなと思っただけからです。例えば、絵を描くのが不得手な子でも、共同制作で行う総合的な活動であれば、どこかしらで自分の得意を發揮できるはず。ポスターをつくることを目的とするのではなく、その過程を通して、自分とその周囲にいる人との関係性に気付いてほしいと考えました。

活動の大きなポイントは、個人とグループの活動を行き来するところです。個人でテーマを考え、グループでテーマを決め、個人で立体造形に取り組み、グループで撮影、そしてまた個人でレイアウトを考える……。特に立体造形では、つくっているものの大きさや様式を統一する

ため、個人の作業をしつつグループで連携するという動きも大事になります。この往復によって自分と他者との視点の違いが明確になり、より深い気付きが生まれるのではと考えました。ポスターづくりを通して、他者とのつながりによって広がる可能性や楽しさを存分に味わってほしいと思っています。

グループで取り組む 自由な撮影会

立体物の写真撮影は、校内で自由に行いました。廊下に寝転がって撮影する生徒もいれば、美術室内に用意した物撮りセットでかっこよく撮る生徒も。グループで話し合いながら、ライティングを調整したり、ものの角度や配置を変えたりして、様々な写真を撮っていました。立体物をグループで撮影することとしたことで、いろいろな組合せや構図にチャレンジすることができ、さらなる世界が広がったと感じます。

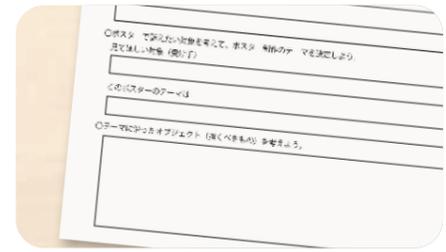
活動の流れ

② 立体物の制作と写真撮影



アイデアスケッチを基にした立体物の制作では、大きさや雰囲気合わせるために、自然にグループ内での声掛けが発生。完成したら、グループで撮影に臨みます。

① テーマ決めとアイデアスケッチ



最初にポスターが共同制作によってつくられていることを説明。その後、タブレットを使って調べ学習をしながら、自由にテーマを考え、アイデアスケッチをします。

④ 相互鑑賞会



社会課題を扱うポスターの他、「お小遣い上げて!」「STOPおやしギャグ!」といったユニークなものも。「伝える」と真剣に向き合ったポスターが披露されました。

③ キャッチコピーの制作とレイアウト



キャッチコピーは個人で考え、レイアウトはタブレットを使い、PowerPointで行います。フォントと色選びは、伝えたいメッセージの「声色」からイメージを膨らませます。

指導計画

時間	領域
11時間	A表現

材料・用具

樹脂粘土、針金、ヘラ、絵の具、タブレットPC、卓上撮影スタジオ、ワークシート、参考作品

題材の目標

- 知識及び技能
立体物の大きさや生命感のある動き、文字の配置や背景との色の対比などの効果を理解して工夫して表す。
- 思考力、判断力、表現力等
伝えたいテーマを基に、形や色彩、立体物の配置や構図、文字による伝達効果などを考え、より分かりやすく印象深く伝えるよう構想を練ったり鑑賞したりする。
- 学びに向かう力、人間性等
協同しながら表現する楽しさを感じ取り、作品鑑賞を通して作者の表現の意図を知ることで、デザインに対する興味や関心を高め、身近なポスターの働きについて考えを深めるなど、意欲的に取り組む。

「伝える」ための総仕上げ

撮った写真には、個人の活動としてキャッチコピーを考え、レイアウトをします。初めに、企業スローガンやACの広告などを見せ、キャッチコピーには「標語や簡潔で分かりやすい直接的なもの」と「見る人に考えを委ねる間接的なもの」があることを説明しました。さらに、どんな言い回しや声のトーンで伝えるのがいいか、メッセージの「声色」をイメージさせました。キャッチコピーやフォントによっても

写真の見え方が変わることを実感しながら、言葉の力について理解することで、より深く、踏み込んだコピーライティングに取り組めたと思います。キャッチコピーが決まれば、フォント選びやレイアウトをして完成。最後は、つくったポスターを他のグループにプレゼンテーションします。制作の経緯をまったく知らない人につくったものの意図やねらいを伝え、反応を受け取ることで、一連の活動の総仕上げができたと感じています。

Message



新型コロナウイルスの影響で、今年度は、例年のような共同制作が行えない状況になりました。そこで考えたのが、SDGsをテーマにした個人活動中心のポスター制作を行うこと。

SDGsは、今、社会的に大きな注目を集めているトレンドワードです。情報が豊富調べやすく、グループワークでアイデアを広げることができない環境下でも取り組みやすい

いつ、どんなときでも、楽しい活動を目指したい

い。また、十七個の項目から一つテーマを選んで掘り下げられるところもいいなと思いました。今後とも感染症や災害などの要因で通常の授業をできなくなる可能性があるのではないかと感じます。そんなときでも、楽しく面白く工夫をしながら授業を行って、できるだけ多くの喜び、経験、情報に触れてもらい、それが後に花開いてくれるといいなと思っています。



生徒たちの作品はこちらからもご覧いただけます。



素材と歴史から知る

画材の歴史を学び、自ら画材をつくってみる



普段当たり前のように使っている画材。それらに着目した授業を行っているのが吉田剛先生です。画材を「学び」、「つくり」、使って「制作する」……制作と鑑賞が連動する授業で、市販のお茶がインクに変化する瞬間、生徒が体感することとは——。「驚き」を大切にしたいという吉田先生に、工夫点などをお聞きしました。

滋賀県 滋賀県立草津高等学校 吉田 剛 先生

制作と鑑賞を連動させる

制作的な活動と、美術の知識を吸収するなどの鑑賞的な活動。この二つの活動を、連続性をもって取り組めないかと始めたのが今回の題材です。一・五コマ(三時間)の授業の中で、絵画の支持体や画材について鑑賞しながら「学び」、画材を自らの手で「つくり」、それらを使ってクロッキーを「制作する」までを、テンポよく連続性をもって取り組みます。

今回「画材」に注目をしたのは、画材はどのような技法を学ぶにも必ず使用するものだからです。小学生で図工を学び始めて、高校一年生は十年目になります。扱う画材を当たり前のもので、扱う画材を当たり前のもので捉えがちですが、新鮮な気持ちで画材に出合わせたい。そして、画材を通して美術を串刺しにして、それぞれの知識や技術を見せることで、高校の美術の最初の授業として奥行きあるスタートが切れるよう目指しました。

実感はインクが変化する瞬間

鑑賞活動の導入は、画材に関する六枚のカードの並べ替え(左ページ上部参照)。何の順番に並べるのか、グループで話し合いながら答えを見付けていきます。美術に関する経験値や知識が少ない生徒も正解にたどり着ける課題でウォームアップをして、絵の具や材料の名前のルーツを個人で考える時間へとつなげます。正解はありつつもオープンエンドに答えを想像する課題なので、生徒たちの回答に対して「今のは惜しかった」などヒントを出し、正解へ導いていきます。

知識を定着させたら、次はタンニンインクをつくり出します。グループにスチールウールと塩を入れた紙コップを渡し、市販のペットボトルのお茶を注ぎます。身近な材料をぐるぐると混ぜ合わせることで、タンニンインクへと変化する瞬間こそがこの授業の山場。インクが黒くなった途端に、「ホンマや！」と生徒たちは驚きの表情を見せます。

鑑賞活動の導入となるカードの並べ替え



ラスコー洞窟壁画

チューブ絵の具

アルノルフィーニ夫妻の肖像 ヤン・ヴァン・エイク

ジャクソン・ポロック White Light 1954

キャンバス

死者の書

画材に関する6枚のカード。指示をしなくても、「歴史の順番」に並べることが分かりやすい図版を選びます。概ね正しく並べ替えられますが、間違いが多いのは「チューブ絵の具」の位置。チューブ絵の具の歴史が意外にも新しいことや、それ以前は徒弟制度が取られており工房によって絵の具の製法が違っていたこと、昔は豚の膀胱に絵の具を詰めていたことなどを伝えると、「え！」と生徒は驚き聞き入ります。鑑賞の時間では、このチューブ絵の具の話で集中力が高まっています。

指導計画

時間	領域
3時間	A表現(1)絵画・彫刻 B鑑賞

材料・用具
筆、カッター、紙やすり、紙粘土、紙コップ、スチールウール、塩、お茶、画材の歴史カード、説明カード

題材の目標

- 知識及び技能
絵画や素材の変遷を通して歴史の大きな流れを理解し、画材制作へ展開することで、既知的に捉えていた画材類などについて奥行きをもって捉え直す機会とする。
- 思考力、判断力、表現力等
グループや個人での思考や作業を繰り返すことでコミュニケーションによる課題解決の能力を養うとともに、自作の画材を用いて制作することで、改めて画材自体の魅力や味わいに気付かせる。
- 学びに向かう力、人間性等
選択肢を与え正解を導きやすい問題とオープンエンドに思考する問題を設定することで各生徒の成熟度に合ったチャレンジを行わせることや、素材が画材に変わる瞬間を体験することを通して活動への参加意識や学習意欲を高める。

Message



私は美術を学ぶことで、素敵だなど思えることなどたくさん出会えました。だからこそ生徒にも美術を通してさまざまなことに気付いてほしいと思っています。そのためにも、美術を通してさまざまなことを学び、考える「美術で教える単元」と、美術とはこういうものだということを正面から教える「美術を教える単元」を使い分け、題材を決めています。

美術の素敵さを真正面から伝えたい

今回の「素材と歴史から知る」は、後者の「美術を教える単元」。画材を通して美術を串刺しするように、美術全体のことを伝えたり、考えたりする機会にしたいと考えていました。美術で教える「美術を教える」両方を取り入れながら、「美術は楽しかったな」と思わせたいですね。

それは、これまでの彼らの人生経験の中で見聞きして想像できることを凌駕した瞬間であると同時に、授業の冒頭で学んだ絵の具の歴史と、インクをつくった体験が連続したものである中でつながる瞬間でもあるのではないだろうか。この驚きを通して私と美術の授業を信用してくれているように感じます。

グループ学習で知る美術の本質

できあがったときの素直な反応が見たので、タンニンインクづくりはグループで行っています。一人だと驚きを表情に出せない生徒もいますが、グループだったら仲間と一緒にあって素直に感情が出しやすいという効果があります。また、私は常々、生徒に「文化の枠組みからはみ出たところに、美術はない」と言っています。文化を形成する最小単位は物事や情報を共有することなので、美術こそコミュニケーション。意見交換をしながら自分たちの答えを見付けるグループ学習を通して、そういった美術の本質的な部分を伝える活動にしました。

▼黄色の円と、青色の円が、左右対称に配置されています。
画面全体のバランスを考えたのでしょう。
「思考力・判断力・表現力等」の発揮です。



考える

製作段階の後半に、たくさんの色の線が加えられています。最初に加えられた波の動きは、卵が成長していく動きへと、新しい意味をまもっています。つくること、工夫したり考えたりすることを、繰り返しながら発展する表現。それは同時に資質や能力の深化です。

光のような丸は、さかなの卵です。一つ一つの色が違うのは「卵に対する親の思いは違って、その思いを受け継いで子どもは成長していく」からだそうです。「詩」は研ぎ澄まされた「言葉」が命。その命に呼応して、言葉の命を膨らませるような表現が行われたことが分かります。

題名「受け継がれる思い」

最初は、夜の海なので黒っぽい色や静かな雰囲気を出そうとしましたが、作品をつくっているうちに、一匹一匹違う思いで「てがみ」になっていると思ひ始め、いろいろな色を使って表しました。

まとめ

「何か」があるから、そこに「言葉」が付けられるわけではありません。「言葉」にすることによって、混とんとした世界から、「何か」が明瞭に切り出され、私たちの目の前に意味をもって現れるのです。すでに大人は、言葉できちんと区分けされた世界にいます。でも、子どもたちは、まだその途中、「言葉」と「イメージ」が行き来するあいまいな世界に生きています。図画工作・美術を通して、「言葉」と「イメージ」を基に、新しい世界をつくりだす力を育てたいものです。

文：奥村高明

日本体育大学
児童スポーツ教育学部
教授

1958年宮崎県生まれ。小中学校教諭、美術館学芸員の後、文部科学省教科調査官として学習指導要領の作成に携わり、現職。日本文教出版Webマガジン「学び!と美術」執筆者。

〈今号のひと言〉

孫の鉄道ブームは終わり、ジジの買った電車のおもちゃもお休み中。今は「危険生物ブーム」とか。うーん、危険生物は買ってあげられないなあ……。



てがみです
みんなだれかの
よぶものは
ひとがさかなと

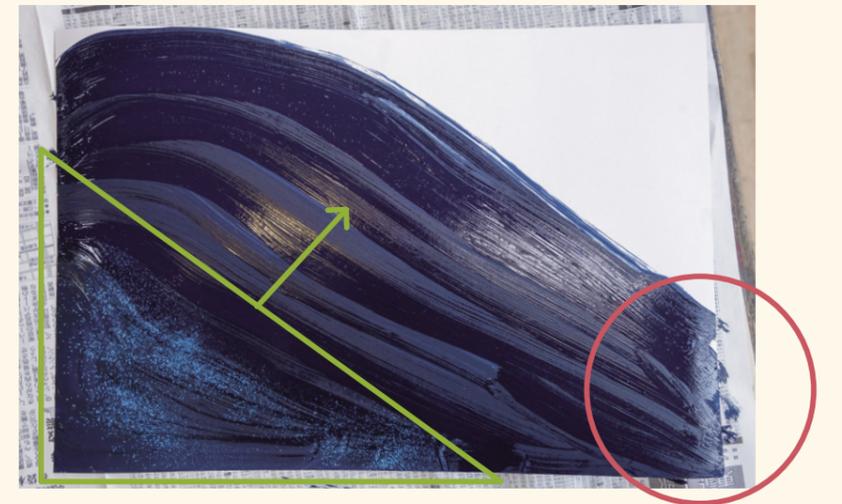
つきのひかりに
てらされて
てがみはあおく
なるでしょう

てがみ 寺山修司
つきよのうみに
いちまいの
てがみをながして
やりました

▼黄色いコンテを粉にして月の光を加え……割り箸で絵の具を丸い形に盛り上げるようにえがいて……「ひかり」「てらされて」など一つの言葉が、様々な用具や技法を用いた「技能」の展開につながっています。



▶この群青色は絵の具箱にはない色です。この子が混色で作りだした色でしょう。授業の振り返りカードを見ると「夜の海、静かで暗い色をイメージした。青は青でも黒を混ぜて暗い青にした」とあります。これまでに蓄積した絵の具の「知識」が活用されています。



たどる

スタートはここでしょう。まず、太い筆で波をかいた後に、青いコンテの粉で波がきらめく様子を表しています。そこから、さらに右上に向けて画面いっぱいに波を広げています。あえて筆跡を残した、うねりのある線です。斜めにする事で、動きが生まれるように意識されています。「うみにながして」という言葉から生まれたイメージを基に、「思考力・判断力・表現力等」を働かせています。

近づく

筆が画面を越えています。動きを画用紙の枠で途切れさせないようにするためにしたことでしょう。創造的な「技能」が高まっていることが分かります。新聞紙は、用具を思い切り使ったり、表現方法を試したりするなど、子どもが安心して工夫することに役立っています。

言葉から生まれる世界

物語文や短い言葉などを基に絵をえがくことは図画工作・美術で定番の学習活動です。それは単なる情景や感情の再現ではありません。言葉を手掛かりにした「新しい世界の創造」です。詩を基に、一つ一つの言葉からイメージを膨らませ、資質・能力を発揮しながら、自分らしい「新しい世界」にたどりついた作品を見ていきましょう。



ねらい

「日本美術に親しみを持ってもらおう！」

導入

屏風について発問し、身近なものから思い起こさせる

「屏風って知ってる?」「何のために使われると思う?」などまずは発問し、身近なものから具体的に思い起こさせる時間を持つ。「結婚式で見たことがある!とか、豪華な雰囲気をつくるため?など、自由に発言したあとで調べると、正解を見つけたときに、自分たちの推理が当たった!と快感が。これが、興味や関心につながっていきます」(長尾先生)



展開

1 広げた状態の『風神雷神図屏風』をまずは黙って鑑賞し、ワークシートに意見を記入。考えるスピードは生徒それぞれなので、一人で考える時間を与えることで自分なりの意見を持つことができる。



2 絵を折り、グループで鑑賞。意見・感想を話し合う。空間の奥行きなど、「折り」の効果を実感させて。



3 広げた状態の『燕子花図』を鑑賞し、感想を言う。反応が薄いときは、教科書の左下にある風景写真を示して比較を。



4 絵を折り、感想を言う。「奥行き」や「遠近感」とその効果などについて学びを深める。

5 俵屋宗達、その工房で制作されたとされる『桜下蹴鞠図』、狩野永徳『唐獅子図屏風』、鈴木基一『夏秋深流図』など、教科書にはない他の屏風も鑑賞させ、折りの効果のバリエーションを見せる。

その後

どこに飾る? どんな雰囲気にする? マイ屏風

折りの効果、余白、構図、空間、立体感を意識し、「どこに飾りたい? どんな雰囲気になりたい?」を大切に個人で屏風を制作。「学習で折りの効果を実感すると、自分でも表現してみたい!と思わせることができると感じました」(長尾先生)



屏風以外でも、折ってみると印象が変わる。



どこを折ったら効果的かな?

この授業展開についての指導案はこちら



むら かみ ひさのり IPU・環太平洋大学副学長 次世代教育学部教授
岡山県出身。岡山市立中学校教諭、岡山県教育庁指導課指導主事を経て、文部科学省教科調査官、及び国立教育政策研究所教育課程調査官に。平成20年の中学校美術、高等学校芸術(美術・工芸)の学習指導要領改訂に携わり、2011年より現職。

令和3年度版中学校美術の教科書、どう使う?

村上センセイの教科書利用のススメ 第1回



教科書の著者である村上尚徳先生と全国の先生が、令和3年度から使用される教科書の題材をもとに、どんな授業展開ができるかをご紹介します。生徒の興味を引き出し、新たな気付きや感動に導くアプローチなど、指導のヒントが満載です。

美術1 P.32-37 折り曲げて味わう 屏風,美のしかけ

造形的な視点

折りや余白などの構図の工夫によってどのような効果があるだろう。



国宝 燕子花図屏風 右隻 尾形光琳筆 根津美術館蔵

造形的な見方を豊かにする視点や、技能に関する目標 発想や構想、鑑賞に関する目標 主体的に学習に取り組むための目標

造形的な視点 題材ごとに掲載している造形的な視点は、指している図版に対して、全体の感じからの印象や気づいてほしいことを示しています。

準備するもの

ワークシート、グループワーク用の図版、その他屏風の図版など

[学びの目標]

構図、余白、折りによる空間や奥行き表現などに着目し、その効果をとらえる。

屏風の表現のよさや美しさ、余白や折りなどの作者の意図と工夫、美術文化について考え、鑑賞する。

屏風の表現のよさや見え方の変化などに関心を持ち、意欲的に鑑賞に取り組む。

この題材について、授業における学習の「核」とは何か、2つのポイントを語っていただきました。

ポイント①

直感的・実感的に味わえるよう促すことが大事

長尾 日本美術に対して中学生は、古い、地味といった先入観がある子も多いので、一年生における日本美術との出会いの演出は本当に大事です。村上 そうですね。そこで今回の教科書では、屏風の鑑賞において立体的に見ることによる印象の変化や驚き、感動を重視しました。中一では理屈的な側面から美術を味わうことよりも、直観的・実感的に味わうことが大切です。日本美術に関心を持つ入り口として扱えたらいいと思います。長尾 私も、導入などでは「身近な所から引き寄せる」ことで、生徒が自分事として思考を深められるようにすることを重視しています。今回の屏風の鑑賞活動についても、そのような視点から授業の流れを考えてみました。

ポイント②

自由な対話を楽しみながら学習の核を押さえる

長尾 『風神雷神図屏風』はまず話が盛り上がりませ。描かれている内容に興味を持ち、「神様なの?」「どうして緑?」と、とたんに話しやすい空気が生まれました。その上で折ってみると、「見つめ合っている!」「動きを感じる!」など余白や構図の面白さも話題に。そういった目で『燕子花図』を見ると、「なんだか花の配置に秘密がありそうだな」と、子どもがワクワクしているのを感じました。村上 『燕子花図』は折りと根の位置で遠近が強調され、『風神雷神図屏風』は折りや余白の効果により空間や向きの変化を実感することができます。教科書にも造形的な視点として示している「折りや余白などの構図の工夫による効果」という学習の核を押さえつつ、自由に対話しながら鑑賞を深めることが大切です。他にも面白い屏風はたくさんあるので、バリエーションを見せながら学びを深めることで、お気に入りを見つけれたりすると、日本美術との出会いとしては成功ですね。



なが おきくえ 東京都国立市立 国立第二中学校
武蔵野美術大学油絵科卒業後現職。東京都中学校美術教育研究会研究局長を6年間、東京都教師道場リーダーを3年間務めた。平成23年「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」作成協力者。

広告や書籍、Webページのデザインなど、幅広い分野で活躍している大溝さん。中でもミュージアム関連のアートディレクションを数多く手がけ、見るものに強い印象を与える。作品集を生み出しています。

interview

グラフィックデザイナー

おおみぞひろし
大溝 裕

Profile

1963年奈良県生まれ。京都精華大学デザイン科専攻。水谷事務所などを経て1998年にフリーとして独立。2001年に個人事務所「Glanz」を設立した。「巨匠ピカソ展」「ルーブル美術館展」など展覧会・美術展のアートディレクションを数多く手がける。



のか、クライアントが何を求めているのかをしっかりと感じ取る。それができれば、あとはスムーズに進むことが多いですね。何話してもなかなかそれを感じ取れないときには苦労します。そこをクリアすると、頭にぼんやりとイメージが浮かんでくる。やりたいうこうしたいという気持ちがあふつと湧いてきます。あとは理屈と感覚で突き詰めていく。とても抽象的な言い方ですが、脳の左側からは理屈で考え、右側からは感覚で考えていくと真ん中あたりでパツと合うんですよ。「伝えたいこと」「ターゲット層」「スベック」などの理屈と、「担当さんは何が好きな」「昔こんなものを見てかっこいいと思ったな」「あの本は面白かったな」といった曖昧な感覚が、脳内のある一点で合致する。それから手を動かすとアウトプットが早いですね。一見すると関係ないようなものが絡み合って、ひらめくんです。

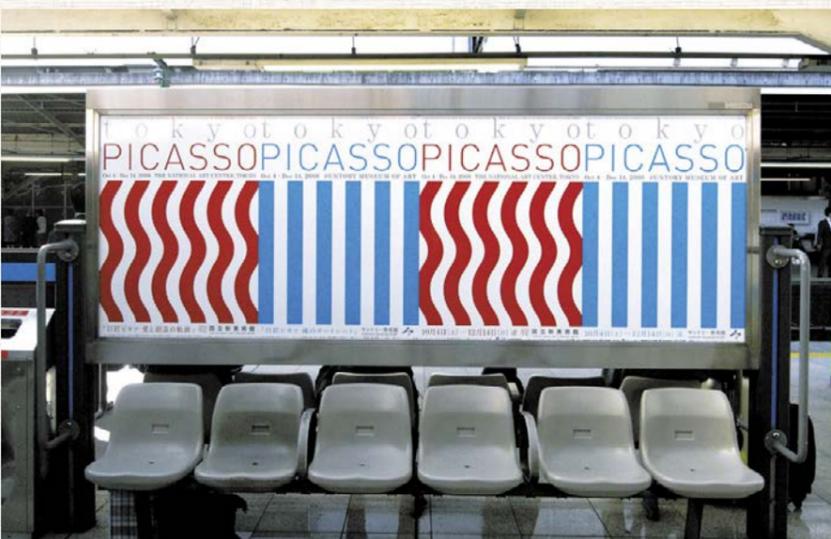
—大溝さんの作品集を見ると、黒の使い方が印象的だなと感じます。

実は、そこを意識したことはまったくなくて、どちらかと言うと色を使うのが苦手なんです。すると自然に黒が残る。黒だけだと重いなと感じる

ときには蛍光色などの軽い色を使うこともありますが、基本的にたくさん色を使うのが得意ではないんですよ。それがむしろ自分の味として見てもらえるのは面白いと思います。デザインを考えると、私はよく「風景をイメージするところから始めよう」と言います。風景の中で、そのデザインがどう見えるのか。大きなポスターがいいのか小さなチラシの方が効果的か。本のデザインなら書店に並んでいるとき、電車の中で小脇に抱えているとき、家で読んでいるとき。さまざまにイメージして、最善手を探していきます。

例えば二〇〇八年の「巨匠ピカソ展」では、二つの会場で開催されるそれぞれ展示イメージを、青のストレートストライプと赤のウェーブストライプで表現し、それが風景の中でどう見えるのかをプレゼンテーションしました。

しかし、大きな展覧会



「巨匠ピカソ展」ポスター

—子どもの頃は美術とは無縁のサッカー少年だったそうですね。

少年サッカーチームに入っていて、将来はドイツへ行ってプロのサッカー選手になるんだと夢見ていました。けれど高校も三年生になって、ようやく才能の限界に気がきます。サッカーで食べていくのは難しい、それじゃあどうしようかと顧みて、そう言えば、昔はよく、サッカーのスパイクやチームのユニフォーム、スポーツ用品メーカーのロゴなどを教科書の隅っこに描いていたなあと思います。たんです。

—と言っても、すぐに美大に受かるほどの力はなかったもので、一浪して予備校に通い、京都精華大学のデザイン科へと進みました。大学では、デザインの何たるかも知らずに、好きなように絵を描いて、食欲にいろいろなものを吸収していましたね。八〇年代、ニュー・ペインティングやイラストレーションのヘタウマが流行っていた時期でした。

デザイン業界にも疎いままでしたが、田舎者特有の憧れと言いますが、とにかく東京に出たい一心で上京して、何とかツテを頼って小さな制作会社に入りました。

などでクライアントの意向がまとまらず、主催の美術館と企画会社とで食い違うこともままあります。またキービジュアルとなる作家の作品をどーんと出しておけばいいと言われることもありますが、本当にそれが吸引力となるのか、ゼロベースで考えることが大事ですね。例えば商品の広告で、

—美術展などのアートディレクションで高い評価を得ている大溝さん。アート関連のデザインに携わるようになったきっかけは。

今では全体の九割程度がアート関連の仕事になっていますが、もちろん最初からそうだったわけではありません。面白い仕事が多すぎて会社を替えること数度。一般的な広告や雑誌などの仕事を任される中で、たまたま美術館からの依頼を担当したことがあったんです。そのときに運よく美術館とのつながりができました。一九九八年にフリーとして独立してからも、美術館から仕事をいただいたり、それを見た他のギャラリーの方から依頼を受けたりと、そうした流れの中で展覧会がらみの仕事が増えていったんだと思います。

—デザインを考える際にはどこから手を着けますか？

依頼内容によって異なりますが、すべてにおいて共通しているのは「話を聞く」ことです。どんな仕事でもまずクライアントと打ち合わせをしますが、その場で、なぜ自分に依頼が来た

商品のビジュアルだけで勝負しているものは意外と少ないはずですよ。

—大溝さんご自身の「強み」はどこにあると感じていますか？

ものすごく斬新で、誰も思いつかないアイデアを出せるとか、あるいはセンスとか、時間をかけずに洒落たレイアウトができるとか、そういう才能は自分にはありません。私がつくるデザインはとてもクラシカルで、ベーシックなものです。

—そんな私がデザイナーとして食べていくには、デザインに強度をもたせることが必要だと考えています。では強度とは何か。それは仕事にまつすぐ向き合うとか、手を抜かないとか粘り強く諦めないとか、つまり「念だ」と思うんですね。作品に込めた「念」は、見た人に伝わると信じているんです。結局、作品は自分なんです。これまでに自分が吸収してきたいろいろなものが、作品という形になって出てくる。

—年相応に引き出しも増えたのか、仕事は年を重ねることに楽しさを感じています。「代表作は今手がけている作品です」と言えたらかっこいいですね。

▶ p20-21では、過去に大溝がデザインした展覧会のタイトルロゴを集め、今号のために大溝自らの手で構成的に配置した。書体や色などの工夫で多様なイメージを豊かに伝えられることが分かる。



▶ 大溝さんのインタビュー動画はこちらから。

Glanz works Typography for the exhibition

ART in LIFE, LIFE and BEAUTY
 Marc Chagall
 The Third Dimension
 シヤガール
 三次元の世界

Pushkin
 100th Anniversary of the Founding of Bauhaus
 come to bauhaus! — the basis of education art and design
 4.11 sat. 5.30 sat
 きたれ、バウハウスのウズ
 造形教育の基礎
 開校100年

Masterpieces from the Centre Pompidou: Timeline 1906-1917

傑作展
 —ピカソ、マティス、デュシャンからクリストまで—

Rietveld
 Gerrit Thomas
Bruna
 Dick
ADO
 Arbded Door Omsluiting

2017.12.23 sat - 2018.2.28 wed

Mirror Neuron
Willor Neuron

SWISS DESIGN
 and The 20th Century Art
 Masterpieces from the Museum of Modern Art, Toyama

PICASSO
 The Riddle of Art: Takahashi Collection

ARTS & CRAFTS
 from MORRIS to MINGEI

Playpack
Artist
メスキータ
 日本70年代

*展覧会開催年降順 | きたれ、バウハウス (2020 静岡立美術館) | ART in LIFE, LIFE and BEAUTY (2020 サントリー美術館) | メスキータ (2019 東京ステーションギャラリー) | 骨ものがたり (2019 飛鳥資料館) | 夢二繚乱 (2018 東京ステーションギャラリー) | アートのなぞなぞ 高橋コレクション展 (2017 静岡県立美術館) | ディエゴ・リベラの時代 (2017 埼玉県立近代美術館) | 尾道芸術祭「十字路-Onomichi Art Crossroads-」 (2017 アートベース百島) | シヤガール 三次元の世界 (2017 東京ステーションギャラリー) | 猪熊弦一郎展「いのくまさん」 (2017 うらわ美術館) | 日本におけるキュビズム-ピカソ・インパクト (2016 埼玉県立近代美術館) | エッシャーの世界 (2016 高松市美術館) | オランダのモダン・デザイン リートフェルト/ブルーノ・ADO (2016 東京オペラシティ アートギャラリー) | ポンビドゥー・センター傑作展 (2016 東京都美術館) | キネティック・アート (2015 埼玉県立近代美術館) | 高橋コレクション展 ミラー・ニューロン (2015 東京オペラシティ アートギャラリー) | ピカソと20世紀美術 (2015 東京ステーションギャラリー) | スイスデザイン展 (2015 東京オペラシティ アートギャラリー) | グループ「幻触」と石子順三 1966-1971 (2014 静岡県立美術館) | アートが絵本と出会うとき (2013 うらわ美術館) | プレイバック・アーティスト・トーク展 (2013 東京国立近代美術館) | たまもの大コレクション展 (2013 埼玉県立近代美術館) | 日本の70年代 1968-1982 | (2012 埼玉県立近代美術館) | マウリツンハイス美術館展 (2012 東京都美術館) | ロシアの夢 1917-1937 (2009 埼玉県立近代美術館) | 生活と芸術 アーツ & クラフツ展 (2009 東京都美術館) | 20世紀のはじまり ピカソとクレアの生きた時代 (2009 Bunkamura ザ・ミュージアム) | バウハウス・デッサウ展 (2008 東京藝術大学大美術館) | ルーヴル美術館展 (2008 東京都美術館) | プーキン美術館展 (2005 東京都美術館)

THE WORLD OF
 MOCESCHER

骨ものがたり
 環境考古学研究室のお仕事

十字路
 ONOMICHI ART CROSSROADS
 尾道芸術祭

たまもの
 TAMAMONOJ
 埼玉県立近代美術館 大コレクション展

アート

MEYTHY
 ー美術のパステルアートー

絵本
 РУССКОГО АВАНГАРДА
1917-1937
 2009.10.10 SAT → 12.6 SUN
 ロシアの夢 1917-1937
 時局から生活へーロシア・ヴァイマル時代のデザイン

Mesquita
 Samuel Jessurun de

BAUHAUS
 experience, dessau

Diego Rivera
 RIVERA
 ADHIS CONTEMPORARIES
 LOUVRE
 Musée du Louvre, Fastes de la Tour de France XVIIIe

ピカソのインパクト
 キュビズム
 日本における
 2016-17

まず見る

第二五回

教科書に載っている、あの作品。
誰もが知っている作品や、初めて出会う作品。
いつもの見方はいったん忘れて、一緒に新しい見方を試してみよう。
それまで見えなかった作品の一面が、見えてくるかもしれません。

コロナ騒ぎで登校を禁じられ、先生や友だちに会えない窮屈な日々を強いられた子どもたちは、何を考え、何を願うばかりです。この事態にちなんで、学童を描いた作品を紹介します。

この作品は、作者の土田麦僊が弱冠二歳にして初出品の文展で三等を受賞し、一躍名をとどろかせた一点です。丸刈りの男児二人と少し背の高い女児、その三人の目線に合わせて設定された構図。廊下に立ってなさい、という今や死語となった叱責の代わりに、左奥の一段高い場所

翻って現在、街中はどこもかしこも重苦しい張り紙だらけです。マスクして、離れて、触らないで、といった注意や禁止事項を書き連ねた文章にはうんざりしますが、あれらは内容以前に、張り出され、視線を遮断したその時点ですでに、街の風景を重苦しくしているのです。実際私たちは今、罰を受けているようではありませんか。

成相 肇 なりあい・はじめ

東京ステーションギャラリー学芸員。
一九七九年生まれ。府中市美術館学芸員を経て、二〇一二年から現職。
主な企画展に「石子順造の世界」(ディスカバー・ディスカバー・ジャパン)、「パロディ、二重の声」など。

〈今号の目玉〉

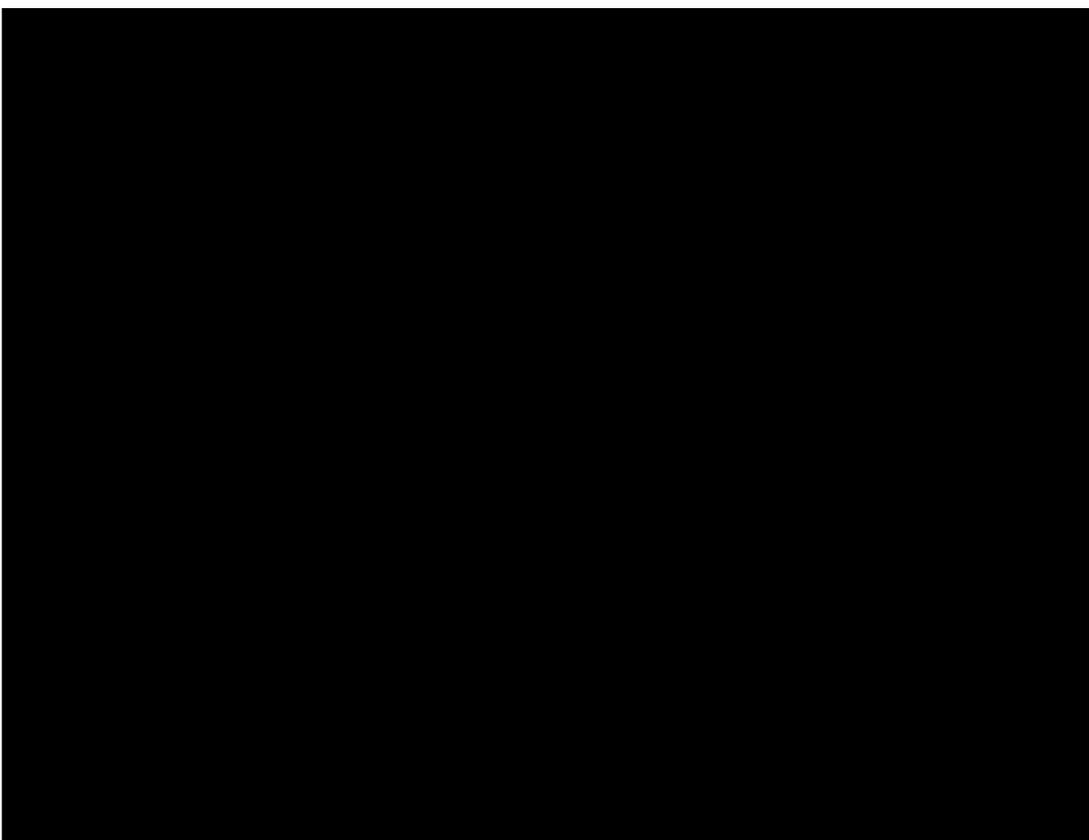
家で育てていたナナフシモドキが無事に数匹羽化し、日々眺めているのですが、一匹だけ他と見た目が明らかに違う個体が調べてみるとこれはオスで(ナナフシは基本的にメスのみで単為生殖する)、非常に珍しいと知り、とてもうれしかったです。とはいえ特別扱いの仕方からず、観察を続けています。



東京ステーションギャラリー 展覧会情報
「河鍋曉斎の底力」
(二〇二〇年十一月二十八日
〜二〇二二年二月七日) ※予定

罰

[絹本着色 / 154.3×198.8cm] 1908
京都国立近代美術館蔵
つち だ ばく せん
土田麦僊 [新潟県・1887~1936]



↙ に見える教卓や積まれた本が示唆する教師の影が——日本を朱で示した地球儀の効果も相まって——いかにも権威的です。男児の足元の通学カバン、さらに女児のそばに落ちている野菊からして、道草でもして遅刻してしまったのでしょうか。

子どもの自然な表情や仕草に注目して語られがちな絵ですが、果たしてそれだけの作品でしょうか。そもそも麦僊は、きわめて巧みな画面構成で知られた画家でした。

何しろ風変わりな画題です。罰。宗教画ならまだしも、少なくとも近代日本の絵画では類例がありません。鑑賞者の視線はまず中央の人物の顔に引き入れられ、別の二人へ、そして徐々に周囲に配された小道具に気が付いていきます。そうして、上述のように自ずとタイトルが示す文脈が知れるように描かれているわけですが、甚だ奇妙なのは、右上の柱に掛けられたボードです。よく

見ると黒地に朱書きの時間割表だと分かりますが、他は紺や薄墨を使って暗色を慎重にコントロールしているのに対して、こだけ塗りつぶしたように極端な明度になっていいます。全体のトーンを無視したような黒は、穴のように、あるいはこちらに向かってせり出すように、強く際立っています。いったいこれは何でしょう。何のために麦僊はこのような描き方をしたのでしょうか。

試しにこの部分だけ隠してみてください。この黒いボードがどれだけ作品の印象を決定付けているか、よく分かるはずです。さらに一歩踏み込めば、「罰」という苦みのある画題を視覚化させているのは、子どもたちの仕草や表情、もしくは足元にちりばめられた小道具よりも、頭上に重々しくのしかかった時間割表ではないか、と感得されるのではないのでしょうか。この一枚の板こそが本作の「目」であると言えるでしょう。

文